



パンセ個別指導学院
 発行所：埼玉県所沢市西所沢1-12-4西所沢駅前ビル5F
 TEL：04-2925-7560
 E-mail：pensee-21-nishitoko@water.ocn.ne.jp

保護者各位

東日本大震災につきまして申し上げます。

三月十一日よりのちパンセで言い続けたのは、「非被災地に生活するわれわれが為すべきことは生活の日常化である」ということでした。巨大地震・巨大大津波・原子炉爆発・風評被害の四撃は、今日わたくしたちの生活の深いところまで影響を与えています。だからこそわたくしたちは、被災地、避難先、仮住まいで生活している多くの人々に対して、日常を崩してはならないと思います。

ここでは三番目の問題に触れさせていただきます。福島

第一原子力発電所の人的問題は、その1号炉が爆発した時点ですべてを見渡すことが可能で――仮に可能でなくとも――少なくとも義務として見渡さなければならぬ人間ないし機関がすべてを見通すことを無意識に回避した時に始まったのだと思います。地震の翌日の新聞の原発事故の「ニュースが小さく、まもなく原子炉建屋（たてや）が次々と吹き飛ばす報道が始まると、わたくしは平成八年の高速増殖炉「もんじゅ」の火災事故を思い出していました。

科学は科学の光で人間の目をひらき、人間生活を豊かにする――その限りにおいて、

ふつうの人たちは素直にその教えを受容し、これからもその姿勢が変わることはないだろう。しかし、増殖炉の安全基準の数値が適切なものであつたかどうかは専門家に任せるにしても、このままでは市井の人々の心に宿った「隠す」という、あれは不正直だ」という気持ちは日本人の心の中で決定的なものになった、と思われしました。

当時、中学三年生の授業でこの問題を取り上げた際にひとりの生徒がこう発言しました。「もんじゅ」という施設を運営する機構はおおやけの存在だから、国民全員が認められているわけでない施設の事故を事故とは言わない、火事を火事と言わない、管理責任をあいまいにする態度はおかしい、と。わたくしはこの生徒の指摘から、最高責任者の責任をあいまいにする態度の深刻さは現代人の最大の病理で

あると思いました。

それだけに留まらず、おおよけの機関やそれに近い存在が、リスクマネジメントにおいて、結果的に自分の初期動作が遅れたのはシステムの不備によるものだという詭弁はもはや官民に限らない社会通有のものになっている。マニュアル通りにやったのだから不成功の責任は自分には無く、マニュアルの不備によるものだと言えらるかに言い切る人間があまたいる中で、誰かはじき出した数字が誰が考案したマニュアルか分からないように出来ているのだから、結果として困難な状況にある人々が救いを求める先が無いという人々ばかりになるのは自明である。

責任の核心が空洞になっていくことに原因する、社会全体のシステムの病理としか言いようがない、わたくしはそう強く思いました。

*

昨日（五月十一日現在）からの報道を見聞きしていると、福島第一原子力発電所の原子炉は考えられる最悪の状態で二ヶ月以上、實際上放置されてきたようです。今後放射線の空中拡散は減るかもしれないが、すさまじい地球規模の海水汚染が進行しているのは確実と思われれます。一体わたくしたち日本人は熊本の水俣病から何を学んだのでしょうか。

震災翌日の新聞は原発事故を小さな記事で想定内の扱いだったのが、原子炉建屋が次々と吹き飛び始めると「想定外の事象」などとケロリと言う企業経営者がテレビや新聞であちこちに出てきた。原子力発電のコントロール技術の限界もしくは現状をわたくしたち全員が徹底して考えてこな

かったことは、三月十一日の大自然の力によって原子炉破損、核燃料溶融という形で明らかになったにもかかわらず、政治家や科学者たちからは「想定外の自然災害」「基準値に照らして」などとわたくしたち庶民の不安をかきたてる言葉しか聞くことができなかったし、いまも聞くことができません。

これらの言葉の誤魔化しは、五十代以上の大人に馴染みの「記憶にございません」と同じ性質の（誰が言い出したかは問題ではない）間違いなく時代を象徴するものです。今後我が日本の国で、想定内とか想定外とかの言葉が便利に使用されないことを心から祈ります。

そもそも科学技術のレベルは及ばないのに、遠い百年先の技術の進歩を想定して稼働させてきたのが原発である以上、いま壊れた原子炉を鎮め

るためには人間の命をかけるしかないのだろうか——多くの人がそう思っているのではないのでしょうか。宮沢賢治が書く、火山の噴火を鎮める人間はグスコブドリ一人でした。しかし、福島第一原発では数千、数万の人が今後何十年も危険に従事し、それに十倍する人々がすでに被曝をしまっています。この事態は、科学技術の問題などではなく、科学の知に人類の未来を委ね切った、現代の文明のありかたの問題です。

それではパンセは何をするのか。

以下、昨年のパンセ新聞で申し上げた言葉を再録させていただきます。

豊かであろうとなかろうと勉強が好きだろうとなかろうと友達の作り方が上手だろうとなかろうと、本当はそんな

差異は大した問題ではありません。人は好むと好まざるとにかかわらず、与えられた条件の下で自分に出来る限りのところで努力し、後悔するところが少ない状態で生活を送る——それが、人が自分の最適解を得ている状態であるとわたくしは思います。

数字やマニュアルに従えば不安が無い、成功が約束されていると納得できる人は、それはそれでよいと思います。

しかし、考えてみれば直ぐに思い至りますが、数字もマニュアルも一般万般に通じる基準とはなり得ません。自分の力で自分の目標に立ち向かう決心をした人間は、確かに、つねに自分と自分以外の人間との違いに不安を覚えることでしょう。それだけではなく、困難な選択をした人間にしたら「易きに就きたいと思う。が、それでは主体性がな

くなってしまう」「逃げ出したいと思う。が、決して逃げたはならない」というような相反する感情に常住坐臥悩まされ続けることでしょう。しかし、やむにやまれぬ意志があつて、敢えて困難な道を選ぶ人間がいたとして、その人間に向かつて「もっと楽な道を進んではどうか」と言うことが、指導者として正直で潔い態度だとはどうしても思われません。

子供であろうと大人であろうと、普通の人間の心に普通に生じる、こうした反対にみえる心の葛藤から目を逸らさずに逆にしつかと見据えたうえで、勇気を持って選択の判断を下し続けて行かなければならない——正直な態度とはそういう覚悟を持つことではないかと考えます。

生徒たちの表情は正直です。言葉は遅れて付いてきても大して問題ではありません。と

くに受験を目前にした生徒たちの表情に正直さ——ひとつの人間の尊厳を見ます。それは、苦しくともやれるだけのことはやろうという決意、とわたくしには感じられます。そういう折です、保護者の皆様とともに最後の最後の瞬間までわたくしも生徒のそばに付き添っていたいものだと思いますのは。

いささか長い文に亘りましたが、ご高読有難うございました。

パンセ個別指導学院塾長 江崎雅春

お見舞い

東日本大震災で亡くなられたかたがたのご冥福をお祈りし、合掌いたします。いまま大震災の影響下で困難な生活を強いられておられるかたがたにパンセとして出来る限りの支援を続けてまいります。


